

魯迅「故郷」の新たな授業づくりの方法 ―井上紅梅訳・原文との比較―

鈴木 恵

一、はじめに

筆者は先に、中学校の第二学年に配当されている古典教材の定番『平家物語』の「敦盛の最期」「扇の的」について、すべての教科書に採録される『新編日本古典文学全集』（小学館）を出典とする本文（語り本系の覚一本（東京大学国語研究室蔵・高野本）を底本とする）と、『平家物語』諸本では最古であるにもかかわらず、何故かこれまで教科書には全く採録されることがなかった、読み本系の延慶本（一二三〇九―一〇年写）とを比較し分析・検討することによって、新たな授業づくりが可能であることを述べた^①。読み本系と語り本系の二系統が存する『平家物語』においては、片方の系統のみに偏った本文の選定は、当該文献の真の姿を探ることがないまま、一方的な筋立てや平敦盛・那須与一のイメージを生徒に植え付けてしまう恐れがあるからである。

本稿では、古典教材ではないものの、中学校の第三学年に配当されている定番の翻訳教材、魯迅「故郷」を取り上げ、教科書に採録される竹内好訳以外の翻訳や魯迅の原文と比較し、分析・検討することを通して、新たな授業づくりの方法を提案したい。あわせて、現行の教科書教材に用意されている極めて僅かな情報だけでは、「学習の手引き」等で求められている学習目標は、ほとんど到達不可能であることを述べたい。

魯迅「故郷」は、『平家物語』同様に現行のすべての教科書（学校図書・教育出版・三省堂・東京書籍・光村図書）に採録されるだけでなく、これ

もまた『平家物語』の場合と同様で、なぜかすべて竹内好の翻訳『魯迅文集』第一巻によっているのである^②。この点からも、改めて追究する価値がある教材である。

なお、「故郷」を初めて教材として採録したのは、教育出版の教科書（一九五三年）であって、以来六五年以上、中学校の国語教科書からは外すことができない教材となっている^③。

二、魯迅「故郷」授業づくりの前提条件

「故郷」の授業づくりの前提として、授業者側が承知しておかねばならないことが多々ある。次下^④にそのいくつかを掲げる。主に、『世界名作全集』第三三巻・解説（増田渉）、及び藤井省三『魯迅事典』、同『魯迅―東アジアを生きた文学』によった^⑤。このすべてを生徒に伝える必要はないが、授業者側はある程度まで押さえておきたいところである。

無論、作者・魯迅と作中の主人公をまったく同一視しているわけではない。そのことは重々承知している。しかし、魯迅その人、その周辺、その時代背景を知らずして、「故郷」の作品理解が深まるとは、到底考えられないのである。

1. 魯迅はどのような時代にどのような生涯を送ったか

① 幼少の時期（〇～一七歳） 一八八一～一九八

魯迅（本名、周樹人）は、一八八一年九月二五日、中国浙江省紹興府の裕福な家庭に生まれた。藤井省三によれば、「周一族は紹興城内の老台門、新台門、過橋台門に分居し、新台門にあった魯迅の興房は一〇親等に当たる人までを含む数家族数十名が同居する大家族であった。」「魯迅の少年時代にはまだ約三ヘクタールの水田が残されていた。」とされている⁽⁵⁾。しかし一二歳の時、父・周鳳儀が受験する科挙の贈賄事件により、祖父・周福清が下獄（七年間）されて以来、周家は没落の一途を辿る。さらに翌年父が重病を患い、魯迅が一五歳の時に三六歳で没してしまふ⁽⁶⁾。そのため魯迅は、早くから家長を意識せざるを得なかった。

「歴史的事件」清仏戦争（一八八四～五年）、日清戦争（一八九四～五年）。※アヘン戦争（一八四〇～二年）は、魯迅が誕生する約四〇年前のことだった。

② 江南路・鍼学堂の時期（一七～二〇歳） 一八九八～一九〇一

南京に出て、生涯を通じて多大な影響を受けた自然科学系の諸学を学んだほか、多くの外国文学に触れた。

「歴史的事件」義和団事件（一八九九～一九〇〇年）

③ 日本留学の時期（二一～二八歳） 一九〇二～一九〇九

二一歳で東京牛込の弘文学院（嘉納治五郎設立）に留学、二三歳で仙台医学専門学校（後の東北大学医学部、恩師は藤野厳九郎教授）に入学する。しかし、二年後には退学して東京で文芸活動を始め。北欧や東欧の被圧迫・弱小民族の文学をあさり、『域外小説集』二冊を出版した。また、一九〇六年に一旦中国に帰国した際、母親が用意した朱安と結婚した。この時代の中国の婚礼は親がすべてを決定し、本人の意向はまったく顧慮されなかったらしい。ただ、纏足であることに加え、文字を知らない古いタイプの朱安を魯迅はまったく好まず、その四日後には弟・作人と東京に舞い戻ってしまう。母親孝行の魯迅としては、精一杯の意思表示であった。

「歴史的事件」日露戦争（一九〇四～五年）

④ 杭州・紹興における教師の時期（二八～三〇歳） 一九〇九～一一

八年に及んだ日本留学を切り上げ、家族の生活を支えるために帰国。杭州の浙江両級師範学堂教員、紹興府中学堂教員兼教務長、浙江山会初級師範学堂の校長などを歴任した。

「歴史的事件」辛亥革命（一九一一年）※待望の新中国の誕生

⑤ 北京における在官の時期（三一～四五歳） 一九一二～二六

前期―辛亥革命の翌一九一二年一月、南京に臨時政府ができ、共和制の中華民国が成立した。魯迅は政府の教育部役人となり、五月に北京に転居する。以来一五年間、教育部に勤務する一方、諸大学の講師を兼ねた。しかし、革命で実権を握ったのは軍閥（中心は袁世凱）であったため、魯迅は次第に絶望感、虚無感を懐くようになる。

後期―友人・錢玄同の勧めにより、雑誌『新青年』への投稿を始める。一九一八年五月に「狂人日記」を発表し、魯迅の文学活動が本格的に始まる。以来、『新青年』に「孔乙己」「薬」「風波」「故郷」などの短編を相次いで発表した。特に『晨报』（北京の新聞）に連載した「阿Q正伝」は、文学史上に魯迅を定位置した。一方、小説と並行して、評論性のエッセイを書き続けた。「道は人が作るもので、初めからあるものでなく、人の多く歩くところが道になる」という考え方が形作られて行く。一九二五年、魯迅は講師をしていた北京女子師範学校において、新生中国にふさわしい進歩的かつ活発な女性・許広平と出会う。

「歴史的事件」中華民国成立（一九一二年）、第一次世界大戦（一九一四～一八年）ロシア革命（一九一七年）、中国共産党成立（一九二一年）

⑥ 厦門・広州における教師の時期（四五～四六歳） 一九二六～二七

三・一八事件に衝撃を受けた魯迅は北京を逃れ、一九二六年八月に福建・厦門大学に赴任した。が、保守的な校風を嫌って、翌年一月に広州・中山大学に転任した。当地では「革命の戦士」「思想界の権威」として歓迎されたが、クーデター後、一種の軟禁状態に置かれる。その後一〇月に許広平と上海に脱出し、許広平との生活が始まる。しかし、この間の様々な事件から、国民党に対する深い憤りと憎悪を抱くに至る。

⑦ 上海における活動の時期（四六～四五歳） 一九二七～三六

魯迅の晩年の一〇年。上海で許広平と家庭を持ち、一子・海嬰をもうけ

る。母の病気で二度北京の家を訪ねるが、それ以外は外出することがほとんどなく、評論性のエッセイを書き続けた。一九三〇年二月に「自由運動大同盟」、三月に「左翼作家連盟」の発起人となり、魯迅は最も有力な指導者とされた。そして、さまざまなペンネームを使って国民党政府を攻撃した。その後、「文芸工作者連盟」が成立し、魯迅はこれを支援したが、一九三六年一月一日に肺結核（直接的には心臓性喘息の発作）で没した。〔歴史的事件〕満州事変（一九三一年）。※魯迅の死後、盧溝橋事件（一九三七年）が起った。

2. 魯迅の家族

〔祖父・周福清〕科挙最終試験に合格（進士）し、江西省の県知事や中央政府の内閣中書を勤めていたが、魯迅の父・周鳳儀が受験する科挙の贈賄事件により、下獄された。以後周家は、経済的に困窮を極める。

〔父・周鳳儀（伯宣）〕科挙受験資格試験に合格（秀才）したが、第一段階試験には合格（挙人）でできなかった。重病を患い三六歳で没した。後に魯迅が西洋医学を志す契機となる。

〔母・魯瑞〕進歩的かつ開明的な女性で、自ら纏足をやめ、独学で文字を学習した。舅・周福清の下獄、夫・周鳳儀の死後もよく周家を支えた。舅の赦免に尽力し、魯迅ら息子たちの勉学を支援した。ちなみに、「故郷」の時代は彼女が六四歳の頃とされる。

〔弟（次男）・周作人〕魯迅より三歳年下。魯迅・胡適らと並ぶ近代中国の文学者。江南水師学堂を卒業後、魯迅に連れられて日本へ留学（立教大学）、英文学等を学びながら兄の文学運動を助けた。この間、魯迅の協力もあって、下宿手伝いの娘・羽太信子と結婚した。一九二一年に中国帰国後は、一七年に北京大学教授に就任し、文学革命の理論家として活躍した。北京大学への就職もまた、魯迅の斡旋による。また、魯迅は作人一家はもとより日本の羽太家にも毎月送金するなど、生活支援を続けたようである。魯迅が北京にいる間に、作人一家は紹興に移り住み、そこで長男・豊一が生まれる（一九二二年）。信子は、妹の芳子を（兄・重久とともに）手伝いとして日本から呼び寄せる。この時期紹興の魯迅の生家には、実に多人数が住んでいた。

※一九二三年七月頃、魯迅と不倫をしたという信子のでっち上げを作人が信じたため、仲のよかった魯迅と作人との関係が険悪となり、ここから周家の崩壊が始まる。

〔弟（三男）・周建人〕中国の生物学者。上海商務印書館編訳所の所員として生物学の教科書、啓蒙書を多数編集・翻訳した。日中戦争時は上海に居住し、魯迅の未亡人・許広平母子を保護した。信子の妹・芳子と結婚（一九一四年）したが、後に離婚して中国人女性と再婚した。

〔正妻・朱安〕日本留学時代に母親の意向で結婚した、魯迅よりも三歳年上の正妻。魯迅は古いタイプの朱安をまったく好まず、通常の夫婦関係ではなかった。

〔新妻・許広平〕魯迅が北京女子師範学校で教鞭を執っていた時の、一七歳年下の教え子。実質的な妻として魯迅を支え、一子・海嬰を産む。

3. 「故郷」の舞台と時代

・「故郷」の舞台は、魯迅の生まれ故郷、紹興酒の産地としても知られる浙江省紹興府の、古びた魯迅の生家とその周辺である。城壁に囲まれた中心都市・紹興府城の人口は、当時約一万人だった。上海―紹興間は、船旅で三泊四日だったが、北京からだると五、六日を要した。

・「故郷」に描かれた時代は、魯迅が北京の教育部に勤務していた三八歳の頃。魯迅は北京八道湾に、大家族が一緒に住むことができる大邸宅を建築する。ここに一家を迎え入れるために、魯迅は一九一九年二月、「故郷」紹興に向かった。

この時期、紹興の魯迅の生家には、少なくとも母・魯瑞、妻・朱安、次男・作人、その妻・信子、甥・豊一、三男・建人、その妻・芳子、義弟・羽太重久たちが住んでいたはずで、そこに魯迅が迎えに来たのである。しかし、小説「故郷」には母親と甥（原文には姪児とある）の宏児（八歳）しか登場しない。

三、魯迅「故郷」の日本語訳

「故郷」は一九二二年五月、『新青年』五月号に発表された。『新青年』

は、北京大学の陳独秀が主宰し、同大学の教授多数を同人とした啓蒙雑誌で、「文学革命」を呼びかけるものであった。「故郷」はその後、魯迅の第一作品集『呐喊』にも収められた^⑧。

「故郷」は、日本でも早くから翻訳されている。李艶「日本における「故郷」翻訳史」によれば、最新の翻訳総合目録である『世界文学総合目録』第一〇巻には、「故郷」を収録する出版物は四三点あるらしいが、李艶の調査では、「大人向け完訳」「子供向け完訳」「子供向け抄訳」「子供向け翻案」を合計すると、実に六二点に上るようである^⑨。しかし筆者の判断で、子供向けのもの、重版、出版社の変更、文庫化等を除外すると、重要な翻訳は次のものである。参考までに、李艶論文の通し番号を付した。

- ① 訳者不明「大調和」第一巻第七号（春秋社、一九二七年一〇月）李艶^①
- ② 佐藤春夫訳「中央公論」第四七巻第一号（中央公論社、一九三二年一月）、李艶^②
- ③ 井上紅梅訳『魯迅全集』（改造社、一九三二年）、李艶^③
- ④ 竹内好訳（旧訳）『魯迅作品集』（筑摩書房、一九五三年）、李艶^④
- ⑤ 田中清一郎訳『魯迅選集・創作集1』（青木文庫、一九五三年）、李艶^⑤
- ⑥ 増田渉訳『世界名作全集』第三三巻（平凡社、一九六〇年）、李艶^⑥
- ⑦ 佐藤一郎訳『世界短編文学全集』第一五巻（集英社、一九六三年）、李艶^⑦
- ⑧ 高橋和巳訳『世界の文学』第四七巻（中央公論社、一九六七年）、李艶^⑧
- ⑨ 松枝茂夫訳『阿Q正伝・狂人日記他六編』（旺文社文庫、一九七〇）、李艶^⑨
- ⑩ 駒田信二訳『世界文学全集』第三三巻（集英社、一九七四年）、李艶^⑩
- ⑪ 丸山昇訳『阿Q正伝』（新日本文庫、一九七五年）、李艶^⑪
- ⑫ 竹内好訳（新訳）『魯迅文集』第一巻（筑摩書房、一九七六年）、李艶^⑫

- ⑬ 藤井省三訳『故郷・阿Q正伝』（光文社古典新訳文庫、二〇〇九年）、李艶^⑬
- このうち、④と⑫は何れも竹内好の訳になるものであるが、通称に従い④を旧訳とし、⑫を新訳とした。

四、教科書教材の出現

冒頭に述べたように、魯迅「故郷」は、一九五三年に教育出版の教科書『中学国語（総合）三の下』に掲載されて以来、六五年以上の長きに亘って、日本の中学校の国語教科書に採録され続けてきた。吉原英夫「中学校国語教科書における魯迅」によれば、この間、三省堂の一九七四年版教科書のみ那須田稔訳を使用した^⑭が、それ以外は竹内好の旧訳か新訳によっているようである^⑮。那須田稔訳は『名作にまなぶ私たちの生き方』第三巻の本文である^⑯。李艶は、那須田訳は三省堂の一九七四年版教科書だけではなく、七六年版までの三ヶ年に亘って採用されていると指摘している^⑰。ちなみに、現行の中学校国語教科書に採録される「故郷」は、すべて前節に掲げた⑫の竹内好訳（新訳）『魯迅全集』第一巻によっている。

五、翻訳の比較対照

右の如く、従来の中学校国語教科書に採録された「故郷」は、極く一部の例外を除けば、なぜか悉く竹内好の④旧訳か⑫新訳によっている。④以前に、①から③の翻訳が公表されているにもかかわらずである。

そこで、次に魯迅「故郷」の翻訳①から④の四点と、これに⑫を加えた五点について比較対照を行ってみたい。ただし、⑫は教科書の本文（今回は教育出版）とした。また、比較対照は便宜的に、「船上からの故郷」「翌朝の我が家」「思い出の中の閩土のセリフ」「楊おばさんとの再会」「閩土との再会」「離郷する船中」の六場面とした。注目する観点もまた、「人物呼称」「助詞の「に」と「へ」」「擬声語」「特徴的な表現」の四項目に限定した。それらは、本文に付した右傍線の種類、すなわち「人物呼称」単線、

「助詞の「に」と「へ」二重線」、「擬声語」破線、「特徴的な表現」波線により区別した。

以下、発表順に、①訳者不明、②佐藤春夫訳、③井上紅梅訳、④竹内好訳（旧訳）、⑤竹内好訳（新訳）の本文を掲げた。仮名遣いは元のままとしたが、漢字の字体や促音表記などは現行に改め、ルビは省略にしたがった。

①訳者不明

〔船上からの故郷〕

自分はひどい寒さを冒して、二千里も隔った、二十何年も別れつきりの故郷に回るところだ。気候はもうすっかり冬だ。それに、漸う故郷に近づいたころ、天氣が暗くもって、冷い風が船艙に入って来て、う、うと鳴る。蓬苔の隙間から外をのぞくと、黄色く黒ずんだ天が低くたれて、遠近には、ものさびしい荒れ果てた村落が幾つか横はってゐる。活気といふものが一つもない。自分は心に悲涼な感じが起って来るのをとめることが出来なかった。あ、これが、あの二十年の間に時々自分の記憶に浮んで来た故郷なのか。

〔翌朝の我が家〕

二日目の朝早く、自分は自分の家の門口について。瓦屋根の棟の上には枯草の折れた茎が沢山、風にあたって揺れ動いてゐる。それが丁度此の旧家が何うしても主人を易へなければならぬ原因を説明してゐるやうだ。本家の幾棟かの母家はもうすっかり引越しが済んでゐる、だから甚くひっそりしてゐる。自分の母屋の外に行くと、母がもう迎へに出て来てそこへ飛び出して来た八つになる甥の宏児の相手になって待つてゐる。

〔思ひ出の中の閩土のセリフ〕

「さうぢやないよ。通りすがりの人が口がかはいたからって一つ摘むなんてのは、おいの方ぢや別に盗坊のうちにいれぢやゐないんだ。獐猪だとか、刺蝟だとか、猪だとかいふやつ番をするんだ。月がよく照つてゐるだらう、耳を立て、きくと、ら、らといふ音がする、それは獐が西瓜をくつてゐる音なんだ、傍へ行って胡叉をふりまはすと、すばしっこくさつさと逃げて行く……」

〔楊おぼさんとの再会〕

自分はびっくりした、「お分かりぢやありませんか。あなたを抱いてあげたこともありましたが」。自分はますますびっくりした。折りよく母がやって来て、傍からかう口を添へてくれた。「永いこと他所へ出てゐましたから、何もかもすっかり忘れてゐんですよ。お前、そら覚えてゐるかい」、自分の方に向いてかういふ、「これは筋向ひの楊二艘さんだよ、……豆腐屋をやつておるで」。あ、わかった。自分が子供の時に、筋向ひの豆腐屋の店に一日座つてゐる女に楊二艘といふのがゐた。皆が綽名をつけて「豆腐屋西施」（日本なら豆腐屋小町とでもいふか）といったものだ。（中略）「お忘れですって？ まあ、お偉い方はねえ……」「決してそんなわけぢや……私……」自分はあはて、立ち上つて言訳をする。「あんなことを、わたしお話があるんですがねえ。迅さん、あなたもうすっかり成金でせう、（以下略）」

〔閩土との再会〕

「あ！ 閩土さん、——来たね？……」（中略）閩土は立ち止つた、顔には嬉しいやうな淋しいやうな氣もちをみせてゐる。何やら唇を動かしたが、別に言葉も出て来ない。閩土のかういふ様子は恭敬の氣持から出てゐるものらしい、かういったのだけははつきりわかる。「旦那様！……」（中略）「まあ、お前何だつて急にさう他人行儀に改まるんだね、お前がたは兄弟同士のやうに呼んでゐたんぢやないか。昔に帰つて迅さんといつたら何うだね」。母は機嫌よくかういふ。

〔離郷する船中〕

彼等には彼等にあふはしい新しい生活がある筈だ、おれたちが未だ生活したことのない生活がある筈だ。（中略）自分がかう思ふ、希望は本来所謂有を無にし、所謂無を有（マ）にするものだ。それは丁度地上の路に似てゐる。その実地上には本来路などはない、走り通る人が多くなると、そこに路をこしらへてしまふのだ。

②佐藤春夫訳

〔船上からの故郷〕

私はきびしい寒さを物ともせず、二千里の遠方から、二十余年ぶりで

故郷へ帰ってきた。冬も真最中となった頃、やつのことで故郷へ近づいた折から、天気は陰気にうす曇り、冷たい風は船室の中まで吹き込んで来て、びゅう／＼と音を立ててゐる。船窓から外を覗いて見ると、どんよりとした空の下に、あちらこちらに横はつてゐるのはみじめな見すばらしい村であった。活気なんてものはてんであったものではない。自分の心には壓へ切れないうら悲しさがこみ上げて来た。ああ、二十年このかた忘れる日とてもなかった故郷はこんなものではなかった。

〔翌朝の我が家〕

次の日の朝、私は自分の屋敷の戸口に来た。瓦の角には多くの枯草の断茎が風に吹きさらされながら生えて、さながらにこの古家が持主を代へなければならぬ原因を説き明し顔であった。幾棟かの母屋はもう荒方の運び出しがすんでしまったらしく、大へんひっそりとしてゐた。私は自分の住ひの棟へ近づいたが、母は早くも私を待ち受けて出て来た。それにつづいて飛び出して来たのは八つになる姪の宏児であった。

〔思ひ出の中の閨土のセリフ〕

「うんや、旅の人が水気が欲しくなつて瓜を一つ取つて食ふなんてのは、おらがの方ぢや泥棒のうちへは算へねえや。番をしなけやならぬのは海狸さ。月の明るい時に、ガリ／＼ガリ／＼いふ音が耳に入つたら、そいつあ海狸の奴が西瓜を嚙つてゐるのさ。だからすぐに刺叉をかまへて忍び足で進み寄つてさ、……」

〔楊おぼさんとの再会〕

私は愕いてしまった。「わしを見覚えてゐるかね? もとはわしがお前さんを抱いてやったものだぜ。」私は益々愕いたものだ。運よくも母が来てくれて、そばからあしらつてくれた。「これは永いこと他所へ出てゐたので、何もかもみな忘れてしまったのですよ。お前おぼえてはゐないだらうね」と私に言ふのであった「それこれがすじ向ひの楊小母さんだよ。……お豆腐屋の店をしてゐた。」や、私は思ひ出した。ほんの幼いころ、表のすじ向ひの豆腐屋の店に一日中座つてゐた。

楊小母さんといふ人が確かにあった。人々はこの人のことを「豆腐西施」――豆腐屋小町と呼んでゐたものであった。(中略)「忘れたつて、全く御身分の高いお方は目が肥えてゐらつしやるからね……」「何そんなわけぢやないよ……、私は……」と私は恐れをなして、立つたままで云つてゐた。「何をどうしたと言ふのです。迅ちゃん、お前さん大へん儲けたつてね。(以下略)」

〔閨土との再会〕

「や、閨土ちゃんか。――よく来たな……」(中略)彼は立つたままでゐた。顔には欲はしさに雑つて打解けない表情があった。唇を動かしてはゐたが声はしなかった。彼の態度は堅固しいものになつて、はつきりと叫んで言ふには、「旦那さま」(中略)「これお前さん何でそんな他人行儀なことを。お前たちは以前には兄弟として話し合つてゐたではないか。」「迅ちゃん」と昔のとほりに呼ばばいいのではないの。」母は愛想よくかう言つた。

〔離郷する船中〕

彼等は私たちがまだ見も知らないやうな新しい生活をすればいいのにと思ふのである。(中略)私は考へるに、希望といふものは一体あるものなのか無いものなのか。それはちょうど地上の路のやうなものである。本當を言へば地上にはもともと路はあるものではない。行き交ふ人が多くなれば路はその時出来て来るのである。

③井上紅梅記

〔船上からの故郷〕

わたしは厳寒を冒して、二千余里を隔て二十余年も別れてゐた故郷に帰つて来た。時はもう冬の最中で故郷に近づくに従つて天気は小闇くなり、身を切るやうな風が船室に吹き込んでびゅうびゅうと鳴る。苦の隙間から外を見ると、蒼黄いろい空の下にしめやかな荒村があたりこちに横たはつていさゝかの活気もない。わたしはうら悲しき心の動きが抑へ切れなくなつた。お、これこそ二十年来とき／＼思ひ出す我が故郷ではないか。

〔翌朝の我が家〕

わたしは二日目の朝早く我が家の門口に着いた。屋根瓦のうへに莖ばかりの枯草が風に向って顫へてゐるのは、丁度この老屋が主を更へなければならぬ原因を説明するやうである。同じ屋敷内に住む本家の家族は大概もう移転したあとで、あたりはひっそりしてゐた。わたしは部屋の外側まで来た時、母は迎へに出て来た。八歳になる甥の宏児も飛出して来た。

【思ひ出の中の閨土のセリフ】

「い、え、旅の人が喉が渴いて一つ位取って食べても、家の方では泥棒の数に入れません。見張が要るのは獺猪、山あらし、土龍の類です。月明りの下でちつと耳を澄ましてゐるとラ、と響いて来ます。土龍が瓜を噛んでゐるんですよ。其時貴郎は又棒を攫んでそつと行つてご覧なさい」

【楊おばさんとの再会】

わたしはぎよつとした。「解らないかね、わたしはお前を抱いてやったことが幾度もあるよ」私はいよ／＼驚いたが、いい塩梅にすぐあとから母が入つて来て側から「此人は永い間外に出てゐたから、みんな忘れて仕舞つたんです。お前、覚えておいでだらうね」とわたしの方へ向つて「これはすじ向うの楊二艘だよ。そら豆腐屋さんの」お、さう言はれると想ひ出した。わたしの子供の時分、すじ向うの豆腐屋の奥に一日座り込んでゐたのが楊二艘とか言つた。彼女は近所で評判の「豆腐西施」で（中略）「忘れたの？ 出世すると眼の位まで高くなるといふが、本当だね」「いえ、決してそんなことはありません。わたし……」わたしは慌てて立上がつた。「そんなら迅ちゃん、お前さんに言ふがね。お前はお金持になつたんだから、（以下略）」

【閨土との再会】

「あ、閨土さん、よく来て呉れた」（中略）彼はのそりと立つてゐた。顔の上には喜びと寂しさを現はし、唇は動かしてゐるが声が出ない。彼の態度は結局敬ひ奉るのであつた。「旦那さま」と一つハッキリ言つた。（中略）「まあお前はなぜそんなに遠慮深くしてゐるの、先には丸で兄弟のやうにしてゐたぢやないか。やつぱり昔のやうに迅ちゃん」と

お言ひよ」母はいい機嫌であつた。

【離郷する船中】

彼等はわたしどもの未だ経験せざる新しき生活をしてこそ然る可きだ。（中略）希望は本来有といふものでもなく、無といふものでもない。これこそ地上の道のやうに、初めから道があるのではないが、歩く人が多くなると初めて道が出来る。

④ 竹内好（旧訳）

【船上からの故郷】

きびしい寒さのなかを、二千里のはてから、別れて二十年あまりになつた故郷へ、私は帰つていった。もう真冬の候であつた。その上、故郷へ近づくとつれて、空模様はあやしくなり、冷い風がひゅうひゅう音を立てて、船のなかへまで吹きこんできた。篷の隙間から外をうかがうと、どんよりした空の下に、わびしい村々が、いささかの活気もなく、あちこちに横たわつていた。心中おぼえず寂寥の感がこみあげてくるのであつた。ああ、これが二十年來、片時も忘れることのなかつた故郷であらうか。

【翌朝の我が家】

次の日の朝早く、私は、我が家の門に立つた。屋根瓦には、一面に枯草のやれ莖が、折からの風になびいて、この古い家が持主を変えるのやむなきにいたつた原因を説きあかし顔である。いっしょに住んでゐた親戚たちは、もう引越してしまつた後らしく、ひっそり閑としてゐる。私が自分の住む一角の入口へ来かつたときには、母はもう、迎えに出ていた。つづいて、八歳になる甥の宏児も飛び出してきた。

【思ひ出の中の閨土のセリフ】

「そうじゃない。通りがかりの人が、喉がかわいて、西瓜を食つたつて、そんなのは、おいらの方じゃ、泥棒なんて思ひやしない。番をするのは、穴熊や、はりねずみや、獺さ。月の晩に、いいかい、かさ、かさつて、音がしたら、猶が西瓜を食つてゐるんだ。そうしたら刺叉を小脇にかかえて、忍び足に近よつて……」

【楊おばさんとの再会】

私は愕然となった。「忘れたかね? よく抱っこしてあげたものだが」
 ますます私は愕然となった。さいわい、母もあらわれて、そばから
 「ながいこと家にいなかったから、すっかり見忘れたらうよ。おまえ、
 おぼえているだろう」と私に向って「筋向いの楊おばさん……豆腐屋
 の」そうそう、思いだした。そういえば、まだ子供のころ、筋向いの
 豆腐屋の店には、一日じゅう、いつも楊小母さんという人が座ってい
 て、人々から「豆腐屋小町」と呼ばれていたわけ。(中略)「忘れたの
 かい? まったく、身分のある方は目がお高いからね……」「そんな
 訳じゃないよ……僕は……」どきまぎして、立ちあがっていった。「そ
 れならね、おききなさいよ。迅ちゃん。あんた、金持ちになったんで
 しょ。(以下略)」

〔閨土との再会〕

「ああ、閨ちゃん——よく来たね……」(中略)彼は立ちどまった。顔に、
 喜びと、寂しさの表情があらわれた。唇を動かしたが、声にはならな
 かった。ついに、彼の態度は、仰々しいものに変わった。そして、はっ
 きりと、こう挨拶した。「旦那様……」(中略)「まあ、何だってそん
 な、よそいきの言葉を使うんだね。おまえたち、むかしは兄弟口をき
 きあつたものじゃないか。むかしの通り、迅ちゃん、つていつておや
 りよ」母は、うきうきしていった。

〔離郷する船中〕

彼らは、新しい生活をもたなければならぬ。私たちがかつて経験し
 たことのない新しい生活を。(中略)思うに、希望とは、もともとあ
 るものだともいえず、ないものだともいえない。それは地上の道の
 ようなものである。もともと地上には、道はない。歩く人が多くなれ
 ば、それが道になるのだ。

⑫ 竹内好訳(新訳) ※教育出版の教科書

〔船上からの故郷〕

厳しい寒さの中を、二千里の果てから、別れて二十年にもなる故郷へ、
 私は帰った。もう真冬の候であった。そのうえ故郷へ近づくにつれて、
 空模様は怪しくなり、冷たい風がヒューヒュー音を立てて、船の中ま

で吹き込んできた。苦の隙間から外をうかがうと、鉛色の空の下、わ
 びしい村々が、いささかの活気もなく、あちこちに横たわっていた。
 覚えぬ寂寥の感が胸に込み上げた。ああ、これが二十年來、片時も忘
 れることのなかった故郷であろうか。

〔翌朝の我が家〕

明るく日の朝早く、私はわが家の表門に立った。屋根には一面に枯れ
 草のやれ茎が、おりからの風になびいて、この古い家が持ち主を変え
 るほかなかつた理由を説き明かし顔である。一緒に住んでいた親戚た
 ちは、もう引越してしまつたらしく、ひっそり閑としている。自宅
 の庭先まで来てみると、母はもう迎えに出ていた。あとから八歳にな
 る甥の宏児もとび出した。

〔思ひ出の中の閨土のセリフ〕

「そうじゃない。通りがかりの人が、喉が渴いて西瓜を取って食つたつ
 て、そんなの、おいらとこじゃどろぼうなんて思やしない。番するの
 は、あなぐまや、はりねずみや、狸さ。月のある晩に、いいかい、ガ
 リカリって音がしたら、狸が西瓜をかじってるんだ。そうしたら手に
 刺叉を持って、忍び寄って……」

〔楊おばさんの再会〕

私はドキンとした。「忘れたかね? よくだつこしてあげたものだが。」
 ますますドキンとした。幸い、母が現れて口添えしてくれた。「長い
 こと家にいなかったから、見忘れてしまつてね。おまえ、覚えてい
 るだろ。」と私に向かつて、「ほら、筋向かいの楊おばさん……豆腐屋の。」
 そうそう、思い出した。そういえば子どもの頃、筋向かいの豆腐屋
 に、楊おばさんという人が一日中座っていて、「豆腐屋小町」と呼ば
 れていたわけ。(中略)「忘れたのかい? なにしろ身分のあるおかた
 は目が上を向いているからね……」「そんなわけじゃないよ……僕は
 ……」私はどきまぎして、立ち上がった。「それならね、お聞きなさ
 いよ、迅ちゃん。あんた、金持ちになったんでしょ。(以下略)」

〔閨土との再会〕

「ああ、閨ちゃん——よく来たね……」(中略)彼は突つ立ったままだつ

た。喜びと寂しさの色が顔に現れた。唇が動いたが、声にはならなかった。最後に、恭しい態度に変わって、はっきりこう言った。「旦那様……。」（中略）「まあ、なんだってそんな、他人行儀にするんだね。おまえたち、昔は兄弟の仲じやないか。昔のように、迅ちゃん、でいいんだよ。」と母は、うれしそうに言った。

〔離郷する船中〕

希望をいえば、彼らは新しい生活をもたなくてはならない。私たちの経験しなかった新しい生活を。（中略）思うに希望とは、もともとあるものとも言えぬし、ないものとも言えない。それは地上の道のようなものである。もともと地上には道はない。歩く人が多くなれば、それが道になるのだ。

以上を比較・対照してみると、次下のようにまとめられる。

（1）人物呼称

・語り手の自称は、①訳者不明本だけが「自分」で、他の四本はすべて「私（わたし）」である。

・少年のころの閩土の自称は、②佐藤春夫訳だけが「おら」で、その他はほぼ「おいら」である。③井上紅梅訳は当該部分にないが、他の箇所では「わたし」であった。

・迅に対する対称は、③井上紅梅訳は「貴郎（あなた）」であるが、その他の四本は「お前（おまえ）」であった。

※ただし、後年の、迅の母親のセリフにおいては、③井上紅梅訳が「迅さん」で、その他は「迅ちゃん」であった。

・大人になって再会した際の閩土の自称は、当該部分にはない。他の箇所では、①訳者不明本が「わし」、②佐藤春夫訳③井上紅梅訳が「私（わたし）」であった。④⑫竹内好訳では、自称は用いられていない。

・大人になった閩土の、迅に対する呼称は、すべて「旦那様（だんなさま）」である。逆に、迅の閩土に対する呼称は、①訳者不明本・③井上紅梅訳が「閩土さん」、②佐藤春夫訳が「閩土ちゃん」、④⑫竹内好訳が「閩ちゃん」であった。

・いわゆる楊おばさんに対する、物語の中での呼称は、①訳者不明本・井

上紅梅訳が「楊二嫂」、②佐藤春夫訳が「楊小母さん」、④⑫竹内好訳が「楊おばさん」であった。

・彼女の自称は、①訳者不明本・③井上紅梅訳が「わたし」、②佐藤春夫訳が「わし」、④⑫竹内好訳は当該部分になく、他の箇所④「私」、⑫「あたし」となっている。

・楊おばさんから迅への対称は、①訳者不明本が「あなた」「迅さん」、②佐藤春夫訳が「お前さん」「迅ちゃん」、③井上紅梅訳が「お前」「お前さん」「迅ちゃん」、④⑫竹内好訳が「あんた」「迅ちゃん」であった。

（2）助詞の「に」と「へ」

ここでは、主人公が帰郷する場面に限定した。具体的には、「故郷へ（に）」私は帰った」「故郷へ（に）」近づくにつれて」の部分である。この場合二つの助詞は、意味用法上ほぼ置換可能だと考えられる。

・①訳者不明本・③井上紅梅訳では、二箇所とも助詞「に」を用いて「故郷に帰って来た」「故郷に近づくに従って」などとしているが、②佐藤春夫訳・④⑫竹内好訳では、両方とも助詞「へ」を使用している。これは、見方によっては注目すべき相違である。

・すなわち、助詞「に」と「へ」の問題は、江戸時代初期にポルトガル人、ジョアン・ロドリゲスの『日本大文典』（一六〇四～八年）によって「京へ筑紫に坂東さ」の諺が指摘されて以来、日本語の地域性と絡めて説明されてきたからである。この地域性は、実は院政時代あたりにはすでに存在していた形跡がある。筆者の調査によれば、平安中期・天慶三年（九四〇）に成立した和化漢文『将門記』古写本のうち、京都近辺で院政時代に書写加点されたとしてある楊守敬旧蔵本で「へ」と加点されている箇所について、名古屋・真福寺所蔵で承徳三年（一〇九九）に書写加点された真福寺本を見ると、ほぼ「に」となっているのである。

・近現代になってもなお、この二つの助詞が地域性を有するか否かは判然としない。和歌山県東牟婁郡新宮町（現在新宮市）出身の佐藤春夫と、長野県佐久郡白田町（現在佐久市）出身で東京育ちの竹内好は何れも「へ」を用いるが、東京出身の井上紅梅は何れも「に」を用いている。

・今回詳細には検討しなかった他の翻訳を見ると、②佐藤春夫訳・④⑫竹

内好訳と同様、二箇所とも助詞「へ」を用いているのは、⑩駒田信二訳・⑬藤井省三訳で、①訳者不明本・③井上紅梅訳と同様、両方とも助詞「に」を用いているのは⑥増田渉訳である。さらに一つ目が「へ」で二つ目が「に」のように、異なる助詞を用いているのが、⑤田中清一郎訳・⑦佐藤一郎訳・⑧高橋和巳訳・⑨松枝茂夫訳・⑪丸山昇訳であった。この「へ」「に」の順が最も多く、逆の「に」「へ」の順は皆無であった。ちなみに、何れも「へ」であった駒田信二は大阪出身、藤井省三は東京出身で、何れも「に」であった増田渉は島根県八束郡出身、「へ」「に」であった田中清一郎・佐藤一郎・丸山昇は東京出身、高橋和巳は大阪出身、松枝茂夫は佐賀県西松浦郡出身であって、地域性は今のところ見出ししていない。

(3) 擬声語

今回取り上げた場面では、帰郷した際の寒風の音、関土のセリフ中の、狹が西瓜を囓る音が主たる擬声語である。

・寒風の音は、①訳者不明本が「う、うと」、②佐藤春夫訳が「びゅうく」、③井上紅梅訳が「びゅうびゅう」、竹内好訳④が「ひゅうひゅう」、⑫が「ビュービュー」であった。①の「う、うと」以外は、清音・濁音・半濁音の相違はあるものの、相似た音で表現されている。

・狹が西瓜を囓る音は、①訳者不明本が「ら、らと」、③井上紅梅訳が「ラ、と」、②佐藤春夫訳が「ガリくガリく」、竹内好の④が「かさ、かさって」、⑫が「ガリガリって」であった。①③、②⑫がほぼ同じであった。

(4) 特徴的な表現

・主人公が帰郷した翌朝、実家を眺める場面に、極めて特徴的な表現が見受けられる。①訳者不明本が「原因を説明してゐるやうだ」、③井上紅梅訳が「原因を説明するやうである」、②佐藤春夫訳が「原因を説き明し顔であった」、竹内好訳④が「原因を説きあかし顔である」、⑫が「理由を説き明かし顔である」となっている。このことから、「説きあ(明)かし顔」なる竹内好の特異な表現は、佐藤春夫訳からの影響であることがわかるのである。この他の翻訳の中では、⑤田中清一郎訳だけが「原因を物語り顔であった」のように「く顔」と表現している。この種の表現は、極めて珍しい。

・楊おぼさんの呼称、「豆腐屋小町」もまた極めて珍しい表現である。「小町」を美人に対して使用するのは、とりわけ日本的だと考えられるからである。①訳者不明本では「豆腐屋西施」とするが、直後に「(日本なら豆腐屋小町とでもいふか)」と括弧付きで割り書き注記している。②佐藤春夫訳では「豆腐屋西施」「豆腐屋小町」とし、④⑫竹内好訳では直に「豆腐屋小町」だけを用いている。この点、③井上紅梅訳は「豆腐西施」とあるだけで、「豆腐屋小町」はまったく用いていない。やはり、④竹内好訳には②佐藤春夫訳からの影響が色濃く、佐藤春夫訳には①訳者不明本の影響がうかがわれるのである。

・今回取り上げたものの以外の翻訳を見ると、「楊二嫂」については、⑥増田渉訳・⑩駒田信二訳・⑪丸山昇訳が「楊二嫂」、⑦佐藤一郎訳が「楊二おぼさん」、⑤田中清一郎訳・⑨松枝茂夫訳・⑬藤井省三訳が「楊おぼさん」であり、「豆腐西施」については、⑬藤井省三訳が「豆腐西施」、⑦佐藤一郎訳が「豆腐西施」「豆腐屋小町」、⑥増田渉訳・⑨松枝茂夫訳・⑪丸山昇訳が「豆腐屋小町」、⑤田中清一郎訳が「豆腐小町」、⑩駒田信二訳が「豆腐美人」であった。

以上(1)から(4)までの各項目を検討した結果、先述した如く、総じて竹内好訳には佐藤春夫訳の影響が色濃く表れていて、佐藤春夫訳には訳者不明本の影響が相応に認められることが判明した。「訳者不明本」佐藤春夫訳「豆腐屋小町」という系譜である。井上紅梅訳は、それらとは一線を画していて、かなり独自色の強い翻訳であることがうかがわれた。

六、魯迅「故郷」原文における表現

そこで、当該の(1)から(4)の項目について、魯迅「故郷」の原文においてはどのように表現されているのか、確認してみたい。原文には、魯迅が初めて「故郷」を発表した、広州新青年社の『新青年』五月号の本文を用いた。

(1) 人物呼称

・語り手の自称は「我」である。

・少年の頃の閩土の自称は、「我」「我們」（私たち）である。また、迅に対する対称は「你」である。母親の言によれば、当時閩土は「迅哥児」（迅ぼっちゃん）と呼んでいたとされている。

・大人になって再会した際の、閩土の自称もまた「我」である。迅に対する呼称は「老爺」（旦那様）である。迅の閩土に対する呼称は「閩土哥」（閩土兄ちゃん）、「你」である。

・いわゆる楊おばさんは、「楊二嫂」として登場し、「豆腐西施」と呼ばれている。彼女の自称は「我」、迅に対しては「你」「迅哥児」（迅ぼっちゃん）を用いている。「迅」は常に自分を「我」と称している。

すなわち、少年時代の迅は閩土のことを「閩土哥」（閩土兄ちゃん）と呼び、閩土からは「迅哥児」（迅ぼっちゃん）と呼ばれていたらしいこと、楊二嫂からは今も昔も「迅哥児」（迅ぼっちゃん）と呼ばれていることがわかるのである。確かに、再会した際の、閩土の迅に対する「老爺」（旦那様）という呼びかけは衝撃的ではある。しかし、改めて子どもの頃も「迅哥児」（迅ぼっちゃん）であったことを考えるべきであろう。それに応じる形で、「我」「你」の日本語訳も再考の余地が大いにあるのではないだろうか。人物呼称の訳し方一つで、印象が大きく異なるのである。

（2）助詞の「に」と「へ」

※この項目は、日本語サイドの問題であるため省略に従った。

（3）擬声語

・帰郷した際の寒風の音は「嗚嗚の響」（うう、鳴き声のような音）である。狼が西瓜を囓る音は「啦啦の響」（らら、雨音のような音）である。

（4）特徴的な表現

・主人公が帰郷した翌朝の、実家を眺める場面「正在説明這老屋難免易主的原因」からは、②佐藤春夫訳や④⑫竹内好訳の如き「説きあ（明）かし顔」という訳は、なかなか出てこないのではないだろうか。「原因」を「説明」することを中心に据えるのが最もオーソドックスであって、「顔」という表現はかなりの意識と考えられる。

・楊おばさんの呼称は、「楊二嫂」、渾名は「豆腐西施」とある。であれば、翻訳においても「楊おばさん」ではなく、単に「楊二嫂」「豆腐西施」と

するのが妥当であろう。そもそも、約五〇歳として登場する「楊二嫂」は、二〇年前は約三〇歳である。主人公の迅は、彼女よりも一〇歳程年少という設定である。はたしてその程度の歳の差で、しかも美人の誉れが高かった「楊二嫂」を「おばさん」と呼ぶのだろうか。とりわけ、「楊二嫂」よりも一〇歳歳年輩であるはずの迅の母親が、「楊二嫂」のことを「おばさん」と呼ぶことに対しては、甚だ違和感を覚えるのである。

これだけの比較対照では、どの翻訳が魯迅の原文に忠実であるかは即断できないし、先学の指摘にもあるように、それぞれに一長一短があつて、未だにパーフェクトな翻訳はないのかもしれない。しかし、筆者の印象では、訳が堅苦しいとか、こなれた訳とは言えないとされてきた③井上紅梅訳が、大局的に見れば、（この中では）最も原文の雰囲気・ニュアンスを活かして表現しているのではないかと推測している。次いで、①訳者不明本であろう。

この点、②佐藤春夫訳は、登場人物たちの物言いがあまりにもくだけていて俗っぽく、なおかつわざわざ「おらが」「うんにゃ」「わし」などを用いていて、方言臭が甚だしい。ことさらに、田舎っぽさを醸し出しているようにも映る。④⑫竹内好訳は、その佐藤訳の影響（とりわけ俗っぽさ）をあまりにも強く受けすぎているのではないかとと思われる。竹内訳に見られる、少年・閩土の「おいら」「おまえ」、楊おばさんの「あたし」「あんた」は、その典型である。

ちなみに、丁秋娜は、「故郷」の教材研究―翻訳文学という側面から考える―において、「故郷」の翻訳は、一九二七年に最初に日本に現れてから、一九三二年の佐藤春夫訳を基礎に、竹内好、増田渉、高橋和巳、松枝茂夫、駒田信二、丸山昇ら十名以上の訳がある。その中では、竹内好訳を除いて、佐藤春夫訳が一番よく知られており、その後の「故郷」の翻訳に大きな影響を与えている。¹³。そもそも竹内好自身も「私の最初の訳は、これは明らかに佐藤春夫の訳を下敷きにはしていないけれど、かなり意識してというか、影響を受けていると思いますね。ここに並べた訳のどれをとっても、さつき、参考資料と申し上げたのを除きますと、だいたいみんな佐藤さんの後塵を拝しているような気がするんです。やは

り、それだけ佐藤春夫は偉かったことになるんですね。「故郷」の日本訳のある程度動かない原型を作った人である、というふうに言えましょう。」と述べているように、佐藤春夫の影響が大きいことを自ら認めているのである⁽¹⁴⁾。また、増田渉がそうした佐藤春夫と昵懇の間柄にあったことは、よく知られているところである⁽¹⁵⁾。

このような事情を勘案するに、現行の国語教科書に掲載される⁽¹²⁾竹内好訳(新訳)と比較対照する本文は、同じ系譜にある⁽²⁾佐藤春夫訳(あるいはその後の増田渉訳)などではなく、⁽³⁾井上紅梅訳ないしは⁽¹⁾訳者不明本が望ましいだろう。特に、井上紅梅訳は、他の翻訳との影響関係が最も少ない(あるいはない)ものと判断されるので、比較対照には最適であると考ええる。

ちなみに、井上紅梅は、魯迅と全く同年の一八八一年に東京で生まれ、家業を継ぐべく東京高等商業学校(後の一橋大学)に入学したが、父親の急死に伴って上海に渡り、支那風俗研究会を立ち上げたり、雑誌『支那風俗』を発行したりしながら、三〇年近く中国関係の著作活動を意欲的に行った人物である。妻も中国人である。長く「魯迅にののしられ」た人物として酷評され、そのために低く評価されてきたのであるが、最近になって、それは魯迅があまりにも増田渉を可愛がり優遇したため、言わば貧乏くじを引いて汚名を着せられたに過ぎず、紅梅自身は極めて優れた中国研究者であったことが明らかになってきた⁽¹⁶⁾。

よって、比較対照本として、⁽³⁾井上紅梅訳を選定することは、むしろ時宜に合ったことではないかと考える。

七、「学習の手引き」の内容

ところで、日本の中学校においては、魯迅「故郷」を教材として、一体何を学習させようとしているのだろうか。次に、それぞれの教科書における所謂「学習の手引き」に着目し、その内容を分析・検討してみたい。ちなみに、学校図書では「学びの窓」、教育出版では「みちしるべ」、三省堂では「学びの道しるべ」、東京書籍では「てびき」、光村図書では「学習」

と呼称されている。以下、該当部分を示す。

学校図書「学びの窓」

〔読み深める〕

①人物や風景の変化に象徴された時代状況を捉えよう。

①閨土、「私(迅)」、楊おばさんの変化を、次のような表に整理しよう。
(縦軸に「閨土」「私(迅)」「楊おばさん」、横軸に「過去」「現在」を配した表)

②①の変化を踏まえ、再会の場面で「私」と閨土が感じたそれぞれの悲しみについて、次の表現を手掛かりにして書こう。

〈私の悲しみ〉

・それらは、何かでせき止められたように、頭の中を駆け巡るだけで、口からは出なかった。

・私は身震いしたらしかった。

・私は、口がきけなかった。

〈閨土の悲しみ〉

・他人行儀

・首を振りどおし

・顔にはたくさんしわが畳まれている

・石像のように

・でくのぼうみたいな人間

・偶像崇拜

③人々の変化は何を象徴しているか。考えを出し合おう。

②未来への願いを捉えよう。

①空の描写の違いを、下のような表にまとめよう。(縦軸に「空の色」「月の様子」、横軸に「帰ってきたときの故郷の空」「閨土との楽しい思い出の中の空」「離れる時に見た故郷の空」を配した表)

②空や月は何を象徴しているか。①を見ながら、考えを出し合おう。

③②の象徴表現はどういう役割を果たしているか。考えを出し合おう。

④「私」の「希望」「願い」はどのようなものか、次の表現に着目して、話し合おう。

・彼（閨土）の望むものはすぐ手に入り、私の望むものは手に入りにくいだけだ。

・希望とは、もともとあるものとも言えぬし、ないものとも言えない。もともと地上には道はない。歩く人が多くなれば、それが道になるのだ。

【まとめ】

① 次の手順で作者や登場人物になって学習を振り返ろう。

① 作者、登場人物（私、閨土、楊おばさん）役を決める。それ以外の人は質問係になる。

② 質問する人はそれぞれ誰に何をきくかを考え、相談して誰が誰にきくかを決める。

③ 質問係も作者や登場人物役の人も、それぞれの立場になったつもりでもう一度「故郷」を読んでみる。

④ 交代で質問する。された方は答える。自分の感想と他の人の感想が異なりそうな事柄に注目する。

⑤ 終わったら立場を入れ替えてもう一度行う。

※この後に、「ついた力を確かめよう（小説）」として、縦に「言葉の力／人々の変化にはどのような意味があるのかを考え、出し合うことができた。」「考える力／「私」の「希望」「願い」について考えることができた。」「知識や技能／他の視点から作品を捉え直すことによるさを感じる事ができた。」と表示される。

教育出版「みちしるべ」

目標と振り返り

・「私」の抱いた「希望」や社会の中での人間の生き方について考え、自分の考えをもつ。

・場面や登場人物の設定のされ方、構成や展開に着目し、作品を批評する。

【確かめよう】

・この作品を五つの場面に分け、小見出しをつけよう。
・出来事を時間の順序に従って並べ替えよう。

【深めよう】

①「私」にとって、少年「閨土」はどのような存在であったか、捉えよう。

【参考】 少年時の出会いだけではなく、その後の「私」の人生においてという点も含めて考える。

②「楊おばさん」と「閨土」について読み深めよう。

（1）二人の過去と現在の違いはどのようなものか。

（2）「私」に対する二人の気持ちを想像しよう。

【参考】 「楊おばさん」が「忘れたかね？」と言うことや、「閨土」が、わんや皿を埋めていたと思われることにも着目しよう。

（3）「私」は現在の二人のことをどのように捉えているのか、またその捉え方の問題点は何か、考えよう。

【考えよう】

「思うに希望とは、……歩く人が多くなれば、それが道になるのだ。」とあるが、ここでの「私」の「希望」とはどのようなものなのか、次の点をふまえながら、文章にまとめよう。

・閨土の「偶像崇拜」を批判しているが、自分の「希望」も「手製の偶像」にすぎないと捉えていること。

・「海辺の光景」を比較すること。

■言葉・表現

「私の覚えている故郷は、……決して楽しいものではないのだから。」に描かれている「もつとずつとよかつた」「しかし」「やはり」「そこで」「なぜなら」などの言葉に着目して、「私」の「故郷」に対する思いの変化を整理しよう。

※この後に、「ここが大事／「語り」を読む」として次の内容が続く。文学作品を読む際には、語られたできごとだけではなく、語り手なぜそのように語っているのかについても考える必要がある。

これまで『少年の日の思い出』や『走れメロス』で学んできたように、語り手の語り方は作品によって異なる。『故郷』の場合、「私」という主人公自身が語り手でもある。この語り手は、過去のことを振り返るような語り方ではなく、現在のできごとを状況するような語り方

をしている。このとき語り手は、自分の「ものの見方や考え方」の枠組みをおして語っているのである。そのため読者は、語り手が直接語っていないことにも注意しながら、語られた内容を読んでいく必要がある。

例えば、冒頭で「私」が故郷に思いをはせる場面は、なぜ語られるのか。「楊おばさん」が「私」に嫌みを言う場面や、「閨土」が見送りに「水生」を連れてこなかった場面は、なぜわざわざ語られているのか。一方、最後の場面で思い浮かべている「海辺の光景」では、なぜ「閨土」の姿が語られていないのか。読者がこのような問いを立て、考えていくことが、文学作品の読みを深める手がかりになっていく。

「希望」についても、若い世代に対する自身の「希望」を「手製の偶像」にすぎないと捉えていた「私」が、なぜ「希望」について「歩く人が多くなれば、それが道になるのだ。」と語っているのかを考えることで、「私」の「希望」に対する思いをより深く読んでいくことができるだろう。このように「語られた内容」を読むことにとどまらず、語り手がなぜそう語るのかを考えていくことが、「語り」を読んでいくことになる。これまで学んできたことを、他の文学作品を読んだり、批評したりする際にも活用し、読みを深めていこう。

■「私」以外の登場人物を「人物ファイル」にまとめよう。

・「閨土」「楊おばさん」「宏児と水生」を取り上げる。

・「人物ファイル」にまとめる際のポイント

- ①名前・年齢・性別 ②外見の特徴 ③「私」との関係 ④「私」から見た特徴や性格 ⑤描かれたエピソード ⑥物語上の役割など。

三省堂「学びの道しるべ」

目標

□場面や登場人物の設定の仕方を捉え、内容の理解に役立てる。

□「私」と「閨土」の言動を根拠としながら、人間と社会について自分の考えをもつ。

〔内容を整理しよう〕

①現在と過去を表す表現に注意して、場面を五つに分けよう。

〔考えを深めよう〕

②次の観点から「私」の感じ方がどのように変化しているか、比較しよう。

①二十年前の故郷と今の故郷

②思い出の中の閨土と今の閨土

③昔の楊おばさんと今の楊おばさん

③故郷をあとにするときの「私」の心境について、登場人物それぞれの関係の変化を手がかりにしてまとめよう。

考えるためのことば

若い世代 道 希望 社会

〔学びをひろげよう〕

この作品「故郷」に副題をつけるとしたらどのようなものが考えられるか、理由とともに紹介し合おう。

※この後に、「読み方を学ぼう5」として「人物設定／仕組まれた関係」がある。

小説の登場人物は、それぞれの役割を担って、互いに関わり合います。「故郷」には二組の少年が登場します。そこには、どのような意味があるのでしょうか。

人物設定は、一人一人の人物の性格づけの問題だけではなく、時間の流れなどとも関係しながら、小説のテーマや仕掛けに関わっています。

▼人物設定の効果を考えることによって、小説のテーマを理解したり、隠れていた仕掛けに気づいたりすることができるよう。

※この後に、三十年前と現在の閨土と「私」、現在と将来の水生と宏児の関係が暗示的に図示されている。

東京書籍「てびき」

作品を読み、社会の中で生きる人間について考えたことをまとめよう

〔目標〕

・場面の展開と人間関係の変化を捉えて、作品を読み深める。

・作品を読んで、社会の中で生きる人間について考え、自分の意見をもつ。

〔読み取る〕

①冒頭の場面から、二十年ぶりに見た故郷の様子を表す言葉を探し、「私」が感じた故郷の雰囲気や、「私」の心境を捉えよう。

②ルントーとヤンおばさんについて、過去の様子と現在の様子とを比べてみよう。

③三十年ぶりの再会の場面から、「私」とルントーのそれぞれの思いを読み取ろう。また、過去の二人の関係からなぜ変化したのかを考えよう。

【たすけ】 人物の発言のほか、態度、動作、表情などの描写にも着目して、二人の思いを捉えよう。

④「私」の考える「希望」や「新しい生活」とはどのようなものなのだろうか。「私」とルントーの関係や、ホンルとシュイシヨンの関係を手がかりにして、話し合ってみよう。

〔考えを深める〕

⑤社会の中で生きる人間の姿について、この小説を読んで感じたことや考えたことを四百字程度でまとめよう。

【たすけ】 「私」、ルントー、ヤンおばさんなど、作品中の登場人物に着目しよう。

※この後に、「言葉の力／人間関係の変化に着目する」が続く。

・作品中に主要な人物が何人か登場する場合、それぞれの人物には異なった特徴が設定されていることが多い。

・立場や考え方の異なる人物が登場し、さまざまな出来事が起こることとで、人間関係が新たに生まれたり変化したりしながら場面は展開していく。

・人間関係の変化を捉え、その背景や理由を考えることは、作品を読み深めるうえで大切である。

※この後、「学びの扉5」として「人物同士の関係に着目する」に続くが、当該教材に「故郷」に関する記述はない。「広がる言葉」が続く。

【広がる言葉】

⑥「故郷」には、「いささか」「寂寥」といった、文学作品などでは見

られるが、現代の日常生活ではあまり使われない、古風な言葉が用いられている。このような言葉を、文章中から探してみよう。

光村図書「学習」

目標

・場面や登場人物の設定に着目して、内容を読み深める。

・時代や社会の変化の中での、人と人との関わりについて考えをもつ。
「故郷」では、回想の中の人々の様子が、現在の様子と比較して描かれている。時代や社会が変わっていく中で、人と人との関わりはどのように変化しているのか話し合ってみよう。

①確認しよう

作品を読み、現在の場面と「私」の回想の場面を確認しよう。また、「私」と他の登場人物との関係を確認しよう。

②読みを深めよう

場面や登場人物の設定に着目して読み取ろう。

①次の風景や人物について、回想の場面と現在の場面では、描写がどのように変化しているのだろうか。それがわかる部分を抜き出そう。

・故郷の眺め ・我が家の様子 ・ルントウ ・ヤンおばさん

②「私」と「ルントウ」の関係はどのように変わったのだろうか。また、なぜ変わったか考えよう。

③自分の考えをもとう

最後に「私」には「希望」という考えが思い浮かぶ。そのとき、「私」はどのような社会を望んでいたのだろうか。話し合ってみよう。

【言葉を広げる】

この作品には、会話の中に「……」が多く使われている。そこには、どんな思いが込められているのか考えてみよう。

【学習の窓】場面や登場人物の設定を考える

文学作品は、場面や登場人物の設定を考えることで、理解がより深まる。次のような観点で、なぜ、そうした設定になっているのか考えることが大切である。

・ある場面が置かれている意味や、場面の並べ方。

- ・人物の性格づけや特徴、置かれている状況。
- ・人物どうしの対比。(立場、性格、様子など。)

〔学習を振り返る〕

- ・現在と回想を対比させた設定から、どんなことが表現されていたか。
- ・作品のどんなところに着目して、社会や人と人との関わりについて考えたか。

以上のように、「学習の手引き」は多くの紙数と言葉を費やして、魯迅「故郷」を深く丁寧に読み取らせようとしているが、大局的には次の二点を学習の到達目標に定めていることが知られる。

(1) 場面の展開と人間関係の変化(特に「私」と閩土との関係)を捉え、それが時代状況や社会状況の変化と密接に結びついていることを読み取る。

(2) 「私」のいう「希望」や「新しい生活」について、当時の時代状況や社会状況から考える。

この二点を達成するためには、相当豊富かつ適切な情報が必要となるはずである。

八、現行教科書に用意されている情報

それでは、現行の教科書にどれほどの情報が用意されているのか、次下で確認してみたい。ただし、魯迅とその家族、時代状況、社会状況を知りうるものに限定した。

学校図書

- ・「一族で住んでいた」大家族制度で、親戚全員が大きな屋敷に同居していた。
 - ・「城内」昔の中国では、町全体を城壁で囲み外敵を防いでいた。
 - ・「スカートををはかないズボン姿」当時の中国の女性は、ズボンの上にスカートををはいていた。仕事をするときなどは、スカートを脱ぐ。
 - ・「小町」美しい娘のことを小野小町にたとえて、〇〇小町と言う。
- 中国語の原文では、古代の美女「西施」の名が用いられている。西施

は日本でもよく知られていて、江戸時代の俳人、松尾芭蕉に次のような句がある。象潟や雨に西施がねぶの花

・「纏足」昔の中国の習慣。小さい頃から布を足に堅く巻き付け、女性の足を大きくしないようにした。歩行は不自由になる。

・「偶像崇拜」彫像など、本来の信仰の対象でないものを尊重すること。

・「作者紹介／魯迅」一八八一―一九三六。小説家。中国に生まれた。植民地化されていく中国を見つめ、国民の自立と封建制からの解放を訴え続けた。『阿Q正伝』などがある。本文は『魯迅文集』第一巻によった。

教育出版

・「城内」昔、中国では、盗賊や外敵を防ぐために、町の周囲を城壁のような高い塀で囲っていた。それで、町のことを城内といったのである。

・「豆腐屋小町」小町は小野小町のこと、小野小町が美人であったといわれるところから、美しい娘のことを「小町」という。原文は「豆腐西施」。「西施」は、古代中国の呉越の争いに登場する美女。

・「兵隊、匪賊、役人、地主」いずれも、当時の中国で人民の敵とみなされていた。「匪賊」は、集団で略奪などをする盗賊。

・「てん足」中国では、昔、婦人の足を大きくしないため、幼児の時から布を固く巻きつける習慣があった。そうしてできた小さい足のこと。

・「作者紹介／魯迅」一八八一―一九三六。中国の小説家・詩人。小説に「狂人日記」「阿Q正伝」、散文詩集に「野草」がある。

三省堂

・「一族」大家族制度で、家長を中心に生活している血縁の家族の集まり。

・「城内」町の中。中国では町全体が城壁で囲まれていた。

・「スカートををはかないズボン姿」当時の中国の婦人は、ズボンの上にひだのあるスカートを着けるのが、一般的だった。

・「豆腐屋小町」原文は豆腐西施。「西施」は中国古代の美人の名。

日本の小野小町同様、美人の別称として用いられているため、こう訳

された。

・「匪賊」集団で略奪を行う盗賊。
・「纏足」昔中国で、女性の足に、幼児から布を固く巻きつけて足を大きくしないようにした風習。

・「作者紹介／魯迅」一八八一―一九三六。作家。中国の生まれ。『阿Q正伝』『藤野先生』など。

東京書籍

・「城内」市内。中国の町は外敵の侵入を防ぐために城壁で守られていることが多いので、城内とは城壁の内側全体に当たる。

・「スカートををはかないズボン姿」当時の中国女性は、ズボンの上にひだのあるスカートを着けていた。ただし、労働のときはズボン姿であった。

・「豆腐屋小町」原文は「豆腐西施」。西施は古代中国の絶世の美女。日本では、平安時代の歌人小野小町が美人だったと伝えられることから、美人の別称として「……小町」が用いられており、ここでもそれを訳語にしている。

・「匪賊」盗賊団。

・「纏足」中国では唐代末期頃から清代にかけて、女性の足を布で固く縛って、足が大きく成長しないようにする習慣があった。その足のこと。

・「作者紹介／魯迅」一八八一―一九三六年、中国の文学者。作品に『阿Q正伝』『狂人日記』『藤野先生』などがある。

光村図書

・「二千里の果て」（前略）（魯迅の故郷は浙江省紹興だが、彼は当時北京に住んでいた。）

・「一族で住んでいた」中国では、近代に入ってから大家族制度が残っていて、大きな家を中心として数家族が同居しているところもあった。

・「城内」人の多く集まっている町の中。中国では町全体が城壁で囲まれていた。

・「スカートををはかないズボン姿」ズボン（褲子）の上にひだのあるスカート（裙）を着けるのが、当時の中国女性の一般的な服装であった。労働のときなどは「スカートををはかないズボン姿」になった。

・「豆腐屋小町」原文は「豆腐西施」。西施は古代中国の美女。平安時代の歌人小野小町が絶世の美女だったことから、美しい娘のことを「……小町」というようになったが、それを訳語として当てたもの。

・「兵隊、匪賊、役人、地主」当時の中国で、民衆の敵とされていた代表的なもの。「匪賊」は、集団で略奪などを行う盗賊。

・「纏足」昔の中国の風習で、女子の足が大きくならないように、幼時から布を堅く巻き付けておくこと。ここでは、そうした小さくした足のこと。

・「作者紹介／魯迅」一八八一―一九三六。本名周樹人。中国の小説家。中国近代文学の父とよばれている。小説『阿Q正伝』『狂人日記』、雑感集『而已集』『三閑集』、散文詩集『野草』、文学史『中国小説史略』など。

以上のように、注記された語句とその中身は、五社の教科書においては大同小異であった。内容理解にそれほど助けにならないと思われる「豆腐屋小町」に多くの言葉を費やしているが、これは訳者・竹内好が「豆腐西施」を「豆腐屋小町」と訳したために、わざわざ説明せざるを得なくなっているのである。このことに象徴されるように、現行の教科書教材に用意されている情報は、概して些末なものであつて、深い読解に導いてくれるものはない。「豆腐屋小町」の説明と並んで、かなりの字数を費やしている「スカートををはかないズボン姿」などは、必要かどうか疑わしい。

さらに驚くべきは、「故郷」がどの時代、どこを舞台に描かれたものであるかを知る手がかりがほとんどないことである。この作品がいつ発表されたものであるかも、まったく記されていないのである。

これについては、各教科書に記述される魯迅の生年と没年、学校図書の教科書における魯迅の紹介文、「植民地化されていく中国を見つめ、国民の自立と封建制からの解放を訴え続けた。」や、光村図書の教科書脚注の括弧内の説明、「（魯迅の故郷は浙江省紹興だが、彼は当時北京に住んでい

た。」)によって想像するしかないのであって、甚だ心許ない。

九、おすび

筆者は、すでに述べたように、鲁迅「故郷」の新たな授業づくりとして、現行の教科書教材がよっている^⑫竹内好(新訳)と、それ以外の翻訳とを比較し、分析・検討することによって、より深くより広く、より正確に「故郷」を読解すべきだと考えている。

中国人の鲁迅が書いた「故郷」は、当然中国人に読ませるべく中国語で書かれている。原文はただ一つである。これを日本人が読もうとすれば、翻訳によらざるを得ないのが一般である。そこに訳者が複数いれば、翻訳もまた複数存在することになる。

ところが、私たちは六五年以上の長きに亘って、竹内好訳の「故郷」だけを読み続け、それで鲁迅の「故郷」を読解したと勘違いしてきた。たった一つの翻訳によって、鲁迅「故郷」を真に理解したつもりになっていたのである。筆者の危惧はここにある。

ただ、中学校の国語教科書には、今なお竹内好訳(新訳)が採録され続けているわけであるから、これを無視することはできない。だとすれば、その本文と比較・対照するにふさわしい翻訳を選定し、逐一読み比べてみたらどうだろう。そうすれば、少なくとも今よりは一步、鲁迅の書いた「故郷」に近づくことができるのではないか、というのが私の意見である。さまざまな翻訳がある中で、竹内好と直接的な影響関係がない(あるいは少ない)ものとして、まずは井上紅梅訳を取り上げるべきだと考える。また、必要に応じて、鲁迅による原文を用いることも提案したい。

また、現行の教科書教材に掲げられている「学習の手引き」等を分析・検討した結果、そこに示された学習目標を達成するためには、周到に用意された相応の情報が必須であって、現行の貧困な情報だけでは、学習目標にまで到達することは不可能に近いことを指摘した。

先に取り上げた古典教材に関しては、そもそも原本が失われてしまっていることが多く、比較的古い写本を、一方で原本の姿を想定しつつ、比較・

対照することが求められた。ところが、今回取り上げた翻訳教材は、原文が厳然とあるわけであるから、複数の翻訳を比較・対照しつつも、最終的には原文を参照することが可能である点、古典教材よりも比較的容易に解にまで辿り着くことができるはずである。しかし、その原文は外国語でもって表現されたものであるため、当該外国語の広汎な知識なくしては難しい。古典教材とはまた異なるハードルを越えるためには、その道の専門家との協力がどうしても必要になるだろう。

日本の小・中学校の教科書教材には、意外に翻訳教材が多く採録されている。本稿は、それらの新たな授業づくりにも援用できる提案になっていると信じている。

〔注〕

(1) 拙稿「古典教材の授業づくり―『平家物語』敦盛の最期をめぐる―」『新大國語』第三九号、二〇一七年三月。同「古典教材の授業づくり―『平家物語』扇の的をめぐる―」『新潟大学教育学部研究紀要』第九巻第二号、二〇一七年三月。

(2) 『鲁迅文集』第一巻(筑摩書房、一九七六年)。

(3) 当初は、『中学生全集七七 中国小説選』(筑摩書房、一九五二年)の竹内好(旧訳)によったものと思われたが、吉原英夫「中学校国語教科書における鲁迅」(『札幌国語教育研究』第九号、北海道教育大学札幌校国語科教育学研究室、二〇〇四年九月)によれば、竹内好の「復員日記」(昭和二年一月六日の条に、「翻訳八枚、「故郷」を了る。「故郷」は傑作である感が強い。佐藤春夫の訳は相当誤訳はあるが増田ほどではない、名訳である」とあるらしく、これに手を加えたものが教材文として採用されたのではないかと推測している。筆者もまた、『竹内好全集』第二五巻(筑摩書房、一九八一年)所収の「復員日記」でこれを確認した。なお、別途この件について教育出版・中学国語編集部に照会(二〇一八年七月一日)したところ、七月二三日付けにて、「出典につきましては、当時の記録が確認できませんでした。(中略)現在では正確な出典を特定するこ

とができません。」という回答があった。

- (4) 『世界名作全集』第三三巻（平凡社、一九六〇年、※増田渉は、中国に渡って魯迅に師事し、魯迅も増田を可愛がった）。藤井省三『魯迅事典』（三省堂、二〇〇二年、同『魯迅―東アジアに生きる文学』（岩波書店、二〇一一年）。この他、村木久美『魯迅の素顔』（1）（3）（文芸研究会、二〇一〇年六月八月）も参照した。二〇一八年五月二〇日アクセス。文芸研究会URL http://kanagawa-hyokai.jp/page05_doukoukai/05_03_bungei/05_03_hyouron.html

- (5) 「興房」は、周家の第一世のことである。

- (6) 注（4）藤井文献によれば、父親の病気については、弟・作人は肺結核と述べているようであるが、肝硬変または日本住血吸虫という説もあるらしい。

- (7) 『新青年』五月号（広州新青年社、一九二二年五月）。魯迅は、この前年（一九二〇年）翻訳刊行された關口彌作『チリコフ選集』（新潮社）の中から「田舎町」などを中国語訳し、『現代小説訳叢』（上海・商務印書館、一九二二年）に収録している。「故郷」はこれに着想を得ている。

- (8) 『呐喊』（北京・新潮社、一九二三年）。

- (9) 李艶「日本における「故郷」翻訳史」（第一二五回・全国大学国語教育学会発表要旨集、二〇一三年一〇月）。『世界文学総合目録』第一〇巻（大空社・ナダ出版センター、二〇一二年）。

- (10) 注（3）吉原論文。

- (11) 『名作にまなぶ私たちの生き方』第三巻、中国・朝鮮・インドの文学（小峰書店、一九六五年）。

- (12) 注（9）李艶論文。

- (13) 丁秋娜「『故郷』の教材研究―翻訳文学という側面から考える―」（第一二三回・全国大学国語教育学会発表要旨集、二〇〇七年一月）。

- (14) 竹内好「日本における魯迅の翻訳」（『文学』一九七六年四月号、岩波書店）。ここで、竹内が「参考資料」と言うのは、①訳者不明本と注（11）『名作にまなぶ私たちの生き方』第三巻所収、那須田

稔訳の二編のことである。

- (15) 増田渉は、東京大学文学部支那文学科在学中から佐藤春夫に師事し、上海に留学して魯迅の教えを受ける際にも、佐藤の絶大な支援があった。

- (16) 勝山稔「改造社版『魯迅全集』をめぐる井上紅梅の評価について」（『東北大学中国語学文学論集』第一六号、東北大学中国文学研究会、二〇一一年一月）。

〔付記〕本稿は、平成三〇年度・新潟大学教育学部国語国文学会夏期研究会（二〇一八年七月二八日、新潟大学附属図書館ライブラリーホール）において口頭発表したものに基づき、これを大幅に修正して稿を成したものである。シンポジウムでは、有益なご意見・情報をいただいた。記して、感謝申し上げます。

本稿はJSPS科研費（基盤研究（B）、課題番号16H03794）及び（基盤研究（B）、課題番号19H01667）の成果の一部である。

（二〇一八年七月二四日成稿、二〇一九年二月二〇日改稿）